

図書館ディスカッション・ルームの活用法

経営学部 太田幸治



浴衣ゼミの様子

夏休みに浴衣ゼミ

名古屋校舎図書館1階にはディスカッション・ルームがある。この部屋は図書館の中で「会話大歓迎」という珍しい空間である。議論が白熱しても防音になっているので、この部屋の外に話し声が漏れることはない。しかも、この部屋はガラス張りである。声は聞こえないがキャンパス・モールを歩く学生からもこの部屋で活動する学生の姿は丸見えである。

今年度のオープンキャンパスでも太田ゼミは浴衣(ゆかた)ゼミを行なった。図書館のディスカッション・ルームが会場であった。今年ゼミの3,4年生が2日間で126人の来場者をお迎えした。

なぜ、浴衣でゼミを行なうのか。理由は楽しいからに他ならない。夏休みにゼミを行なうのだから楽しい要素を取り入れてもいいではないか。

学生たちは浴衣を着ているが真面目にゼミ体験会を開催していた。浴衣ゼミのスタンスは、自身の研究で行き詰まっていることを来場者にそのままぶつけて、一緒に議論するという。浴衣ゼミでは、大学生が高校生に何かを教えるのではなく、大学生と高校生が一緒になって「あーでもない、こーでもない」と悩む。そんな体験を来場者にしてもらうのが浴衣ゼミである。



ゼミではどんなことが学べる？

ゼミナールとは、ゼミ生が教員とゼミの仲間に徹底的に脳味噌を鍛えられる時間である。

毎週の太田ゼミでは3年生はグループ研究を、4年生は卒論執筆に向けた個人研究を発表する。各発表について、教員や学生が「あーでもない、こーでもない」と意見する。発表者はそれに答える。その答えに、また「あーでもない、こーでもない」という意見が出る。かような議論を繰り返す。

ゼミは研究発表の時間であり、議論の時間である。太田ゼミの学生には、ほぼ毎週ゼミの発表が回ってくるので、発表の準備をゼミの開始前におかねばならない。とりわけ3年生はゼミの時間外でグループワークを頻繁にしなければならない。

キャレルデスクで至福の時を過ごす

図書館のキャレルデスクで、本や論文、そしてデータと向き合い、時が経つのも忘れて思考を巡らせる。難しい文献ほど何度も読み返し、文意を捉えるために思考を巡らせる。場合によっては外国語の辞書のみならず、『日本語大辞典』を開きながら内容の理解に挑む。これは大学生ならば、経験しなければならぬ至福の時である。筆者も、図書館という知的な空間で過ごすかような時間は大好きである。

大学の楽しさ=ディスカッション・ルームの楽しさ

~「わからないという大切さに気づき、それを他者と分かち合うこそ大学」~

だがしかし、筆者は、今回のコロナ禍以降、図書館のディスカッション・

ルームにこそ大学の面白さが凝縮されていると考えるようになった。2020年の前期の講義期間、大学が閉鎖されオンデマンド講義中心になって筆者が確信したのは、大学は知識を理解するだけのところではないということであった。大学は、学生が授業を受け単位を取得し、卒業証書を得らばいいというところではない。

では、大学は何をやる場所なのか。2020年7月28日『日本経済新聞』(朝刊)、1面の社説「春秋」の一節が本質を突いていた。それは「(略)あらゆる知識がネット上から得られる現代社会で、わからないという大切さに気づき、それを他者と分かち合う場こそ大学である(以下、略)」。この考えに筆者は100%同意する。

これを行なえる場が、ディスカッション・ルームなのである。

仲間と議論することは、考えること

社会学者の大澤真幸氏が興味深いことを述べている。以下、要約しよう。「そもそも人間というのは、特に考える動物ではない。人間が考えるようになるきっかけは、他者からのインパクトである。特に若いうちは、何も権力関係のない仲間ばかりだから議論しやすいだろう。ゼミ生なんてその仲間の典型である。議論は相手を説得し切ることではない。議論で重要なことは、自分自身の言っていることの中のどこに相手が納得していないのかが、鮮明になる、ということである。思考は自分の内側から湧いてくるわけではない。

思考は、人を説得するということと一体化している。議論をしていくと『なかなか相手にわかってもらえない』という気持ちにもなるが、そこで開き直ることは、探求には禁物である。

その、分かってもらえないという想いはおそらく一生消えないだろう。し



考えるということ
知的創造の方法
大澤真幸 著
(河出書房新社 2017)
名図開架 002:074

文中で一部要約した一冊。
ぜひ、文系大学である愛大の学生諸君に読んでほしい。



コア・テキスト
経営学入門 第2版
高橋伸夫 著
(新世社 2020)
名図開架 335.1:Ta33

第5章には、経済学部、経営学部のゼミナールの一般的な姿が書かれている。爆笑必至ゆえに一読をお薦めする。



勉強の哲学
来たるべきバカのために
増補版
千葉雅也 著
(文春文庫 2020)
名図開架 002:C42
※2017年発行あり

勉強や単位取得は就職のためとか、コスパよく勉強をしたいと思っている学生諸君に読んでほしい。無駄なことほど面白いということを思い出させてくれるし、それを論理的に考えさせてくれる。勉強に意味を見出そうとしているうちは勉強を楽しむことはできない。

かし、それに耐え、何とか乗り越えようとする努力を繰り返さないと、思考が深まらなくなってしまう。考えるということの最終的な産物は言葉である。言葉にしないと自分が感じた感情はその瞬間にただ消えていく。議論しても意味がないと考える人もいるだろう。コスパが悪いとか思う人もいるかもしれない。しかし、自身の考えが意味を持つようになるためには、その考えを言葉にする必要がある。言葉には考えを永続化する作用がある。」

つまり、人は議論しないと考えないということである。仲間と「あーでもない、こーでもない」と議論することで、自身の考えを言葉にできるようになる。考えを言葉にすることが思考にとっては非常に重要なことなのである。

人の目を見て話をする

LINEでグループワークをやろうとしても上手くはいかない。これらのツールでは皆で「あーでもない、こーでもない」という議論が上手くできない。そこでは、メンバーが一斉に話をすることもできないし、メンバーの表情から反応をうかがうこともできない。Zoomでも駄目である。やはりグループのメンバーが、それぞれの目を見て話をする、目を見て話を聞くということが同時にできる対面での議論は圧倒的に有効である。言外の情報もメンバー間を行き来するのが対面でのコミュニケーションである。研究をグループで作りに上げていくプロセスは対面に勝るものはないと筆者は考える。オンラインのコミュニケーションでは、「わからないという大切さを仲間と分かち合うこと」が十分にできないのである。

ディスカッション・ルームの活用法

筆者は自身のゼミ生たちに図書館のディスカッション・ルームを活用する

ことを勧めている。先にも述べたように、ゼミの時間はグループ研究を発表する時間であるため、毎週ゼミまでに各グループで研究を進めておく必要がある。グループワークは議論しなければできない。議論する場所として、図書館のディスカッション・ルームは最適である。

ディスカッション・ルームが最高な点は、図書館内にあることから文献、資料へのアクセスが容易なことである。議論するにしても、文献や資料は必要である。簡単にインターネットのサイトに頼るなんて学生としては最低だ。まずは文献である。ゆえに、ゼミのグループワークにとってディスカッション・ルームは最適な場所となる。

グループワークで一番やってはいけないことは、メンバー全員でパソコンを囲んでパワーポイントのプレゼン画面を作ることである。パワーポイントは、清書とプレゼンの道具に過ぎない。プレゼンの画面などプレゼンの直前にメンバーの1人が作ればよい。グループワークではプレゼンのテーマは何にするのか、どういう手順で報告するのか、それらは、なぜなのか、を皆で議論するべきである。そして、それぞれの中身について議論するべきである。

ディスカッション・ルームではホワイトボードを貸し出している。ホワイトボードを囲んで、そこに皆の意見を書いていき、意見を集約する。この過程がグループワークそのものである。

ディスカッション・ルームを部活やサークルのミーティングでも活用してほしい。部活やサークルで部の方針や次の試合の戦略を立てる際にメンバーでホワイトボードを囲んで議論して欲しい。なぜなら、かような議論も「わからないことの大切さに気づき、それを仲間たちと分かち合う」ことだからである。

冒頭にも述べたように、この部屋は

ガラス張りである。この部屋の中の活動は外から丸見えである。この部屋で活動することは外にいる学生諸君に刺激を与えていることになる。

だからこそ、行儀よくこの部屋を使ってほしい。利用のルールを守ってほしい。またディスカッション・ルームで居眠りすることや、トランプやUNOといったゲームをすることも遠慮願いたい。この部屋での活動は、他の学生諸君に刺激を与えていることを忘れてはならない。

文化の発信地としてのディスカッション・ルーム

図書館には学生サポーター「トップ」がいる。そのメンバーが主催となり、過去にはディスカッション・ルームを会場とした演劇や映画作品のDVD上映会が行なわれていた。その際には、ただ上映会だけをするのではなく、その作品にまつわる解説を教員がしたり、学生たちが説明プレゼンをしていたと記憶している。

またディスカッション・ルームでは、2013年からコロナ禍前まで毎年「ビブリオバトル」の地区予選が行なわれていた。「ビブリオバトル」とは、本の面白さを紹介するプレゼン大会である。プレゼンを聞いて、どの本が一番読みたくなったかで勝敗が決まるという面白いイベントである。かようなイベントはそのうち復活するであろう。その際には自身がプレゼンターになることはもちろん、オーディエンスとして参加することもお薦めする。

このように図書館のディスカッション・ルームは文化の発信地としての役割も担っている。学生諸君にはゼミで部活・サークルで、はたまた文化を感じに図書館のディスカッション・ルームを訪れてほしい。そうすれば、「わからないということの大切さに気づき、それを分かち合うこと」ができるであろう。